

鹿児島県のヤクシカ対策について

鹿児島県環境林務部自然保護課

【平成 26 年度の取組状況】

1. 特定鳥獣（ヤクシカ）保護管理計画の検証について

(1) 農林業被害の推移

ヤクシカによる農業被害額は、平成 23 年度の 41,968 千円をピークに、平成 24 年度、平成 25 年度と減少したが、平成 26 年度は 10,725 千円と前年度の約 2.5 倍に増加した。

民有林における林業被害については、平成 18 年度以降報告されていない（表 1）。

また、作物別の農業被害については、タンカンの被害額の割合が大きいという傾向はこれまでと変わらないが、被害額が全体的に増加している（表 2）。

表 1. ヤクシカによる農林業被害額の推移

(単位：千円)

区分		年度										
		H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
被害額 (千円)	農業被害	6,285	6,461	5,471	3,393	3,867	4,147	23,471	41,968	24,232	4,134	10,725
	林業被害	2,938	2,867	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	9,223	9,328	5,471	3,393	3,867	4,147	23,471	41,968	24,232	4,134	10,725

表 2. ヤクシカによる農林業作物別の被害の推移

(単位：ha, 千円)

区 分		平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度	
		被害面積	被害額	被害額	被害額	被害面積	被害額	被害面積	被害額	被害面積	被害額
農業	水稻	8	575	8	713	7.5	757	0.3	15	3	259
	ポンカン	70	7,029	90	15,143	65	8,173	26	1,564	34	3,898
	タンカン	55	13,585	55	20,196	30	10,272	14.1	1,971	35	4,937
	パッションフルーツ	0.5	119	0.5	19	0.5	22	0	2	0.2	19
	サツマイモ	7	211	10	2,037	8	1,366	11.2	549	10.4	456
	ラッキョウ	4	1,757	2	1,182	2	490	0	0	0.2	12
	茶	5	195	50	2,678	50	3,154	2	33	30	1,144
	計	149.5	23,471	215.5	41,968	163	24,232	53.7	4,134	112.8	10,725
林業	スギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		149.5	23,471	215.5	41,968	163	24,232	53.67	4,134	112.8	10,725

(2) 雄雌別捕獲数の推移及びメッシュ別捕獲実績

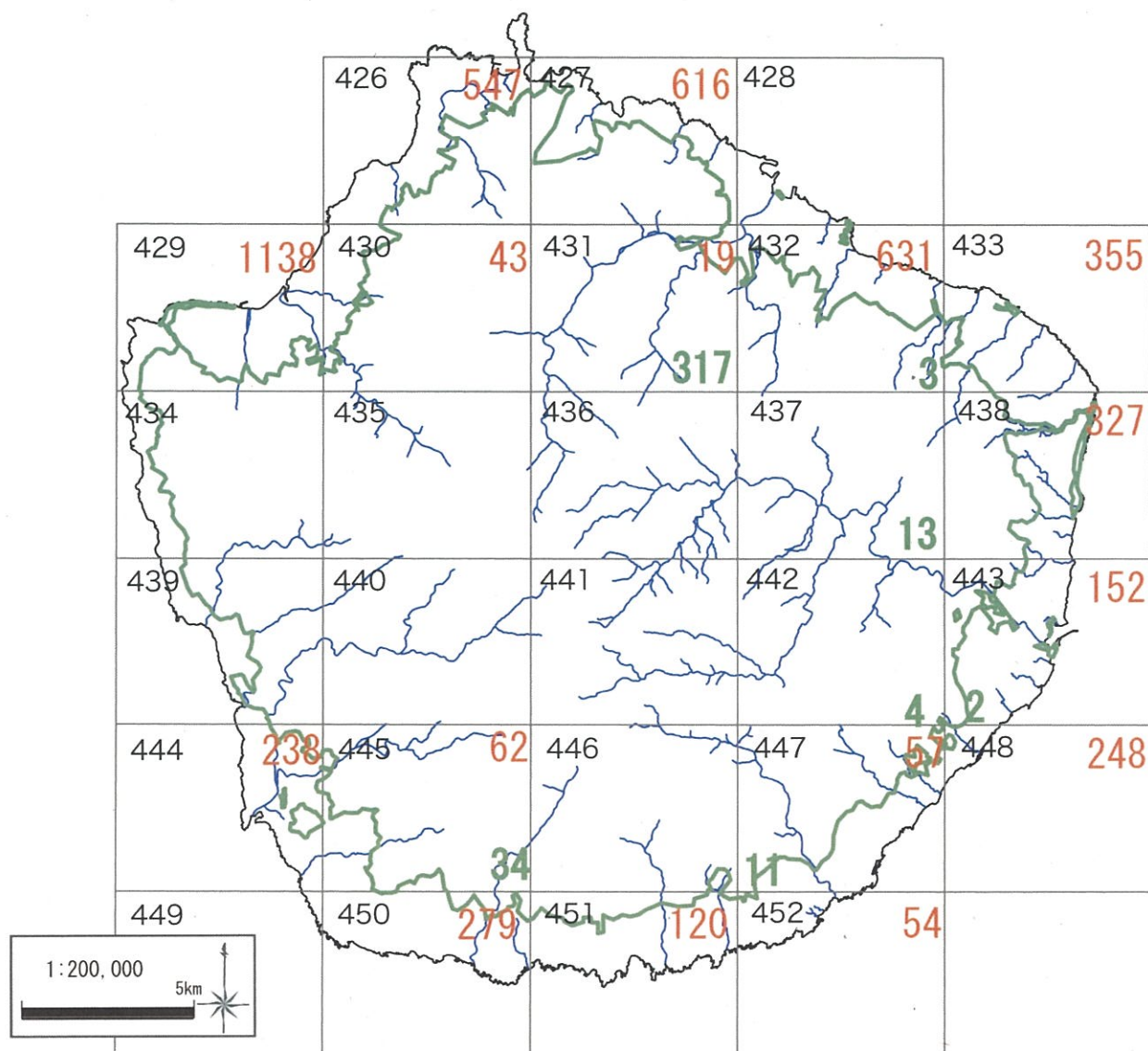
捕獲数は、特定鳥獣保護管理計画実施以前（平成 21 年度）の 480 頭から、平成 24 年度及び平成 25 年度でその約 9 倍となる約 4,500 頭に増加し、平成 26 年度はさらに増加し 5,000 頭を超える捕獲数となった。また、屋久島町では、年間を通じて有害捕獲を実施していることから、狩猟による捕獲は、県外からの狩猟登録者の 1 頭のみとなっている（表 3）。

メッシュ別の捕獲実績は図 1 に示すとおりで、全体に捕獲が増加しているが、特に島の北部のメッシュ（426, 427, 429, 432, 433）において著しく増加している。

表 3. ヤクシカの雄雌別捕獲頭数の推移

(単位：頭)

区分	年度	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
狩猟	オスジカ	0	0	0	0	0	0	110	127	361	188	1
	メスジカ	0	0	0	93	114	155	140	189	353	176	0
	小計	0	0	0	93	114	155	250	316	714	33	1
有害	オスジカ	165	246	218	117	97	181	801	1,131	1,823	1,754	2,264
	メスジカ	146	48	150	159	108	144	897	1,159	1,993	2,408	3,006
	小計	311	294	368	276	205	325	1,698	2,290	3,816	4,493	5,270
合計	オスジカ	165	246	218	117	97	181	911	1,258	2,184	1,942	2,265
	メスジカ	146	48	150	252	222	299	1,037	1,348	2,346	2,584	3,006
	合計	311	294	368	369	319	480	1,948	2,606	4,530	4,526	5,271



民有林，町有林内捕獲数：4,886 頭

国有林内捕獲数：384 頭

※狩猟の1頭は含まず。（狩猟捕獲メッシュ：429）

図1. 平成26年度ブロック別，メッシュ別捕獲頭数

2. 密度推定調査

環境省モニタリング調査地点及びその結果や植生・植物相の被害，回復状況，学識者の意見等を踏まえ，5地点の補完調査地点を設定し，糞粒法による調査を行い，ヤクシカの分布密度に関するデータを整理し，地域区分ごとの個体数などについて分析した。

調査の結果，西部の県有地内1地点を除き，各地点で西いずれも密度は増加した。特に北部，南部の増加が著しい（表4）。また，捕獲圧が比較的にかかっている北部，南部民有地での個体数密度の増加の割合から，増加率についての検証が必要と考えられる。

また，鹿児島県のデータに環境省，林野庁分を加えて分布密度パターンの作成を行った。コンター図は逆距離加重法を用いて島内全域を50mメッシュにより補完した（図2，表5）。

なお、コンター図では、全島として、西高東低の傾向が示されているが、この結果については、島の東側全体で、特に中高標地域における地点数が不足していることを考慮する必要がある、推定頭数についても、本手法では今回の糞粒地点数および位置の関係から、平成 25 年までの推定値と比べて北部、北東部、南東部個体数推定値においては、過小評価、西部については過大評価となっている可能性がある。

表 4. 各密度調査地点の概要とヤクシカの推定密度

区域 ブロック	調査 地点	緯度 (北緯)	経度 (東経)	地域	H24 年度 糞粒数 (粒)	H24 年度 推定密度 (頭/km ²)	H25 年度 糞粒数 (粒)	H25 年度 推定密度 (頭/km ²)	H26 年度 糞粒数 (粒)	H26 年度 推定密度 (頭/km ²)	増 減
北部	1	30.42440	130.45860	吉 田	233	40.0	287	39.3	576	58.2	↑
西部	2	30.35040	130.38810	西 部 県有地	737	135.1	1,509	206.9	1,144	123.1	↓
西部	3	30.25870	130.42720	中 間	512	93.9	838	114.9	2,228	239.8	↑
南部	4	30.24110	130.52660	南 部 林 道	167	29.8	48	6.6	134	14.4	↑
北部	5	30.38857	130.41324	永 田	—	—	184	19.1	683	69.0	↑

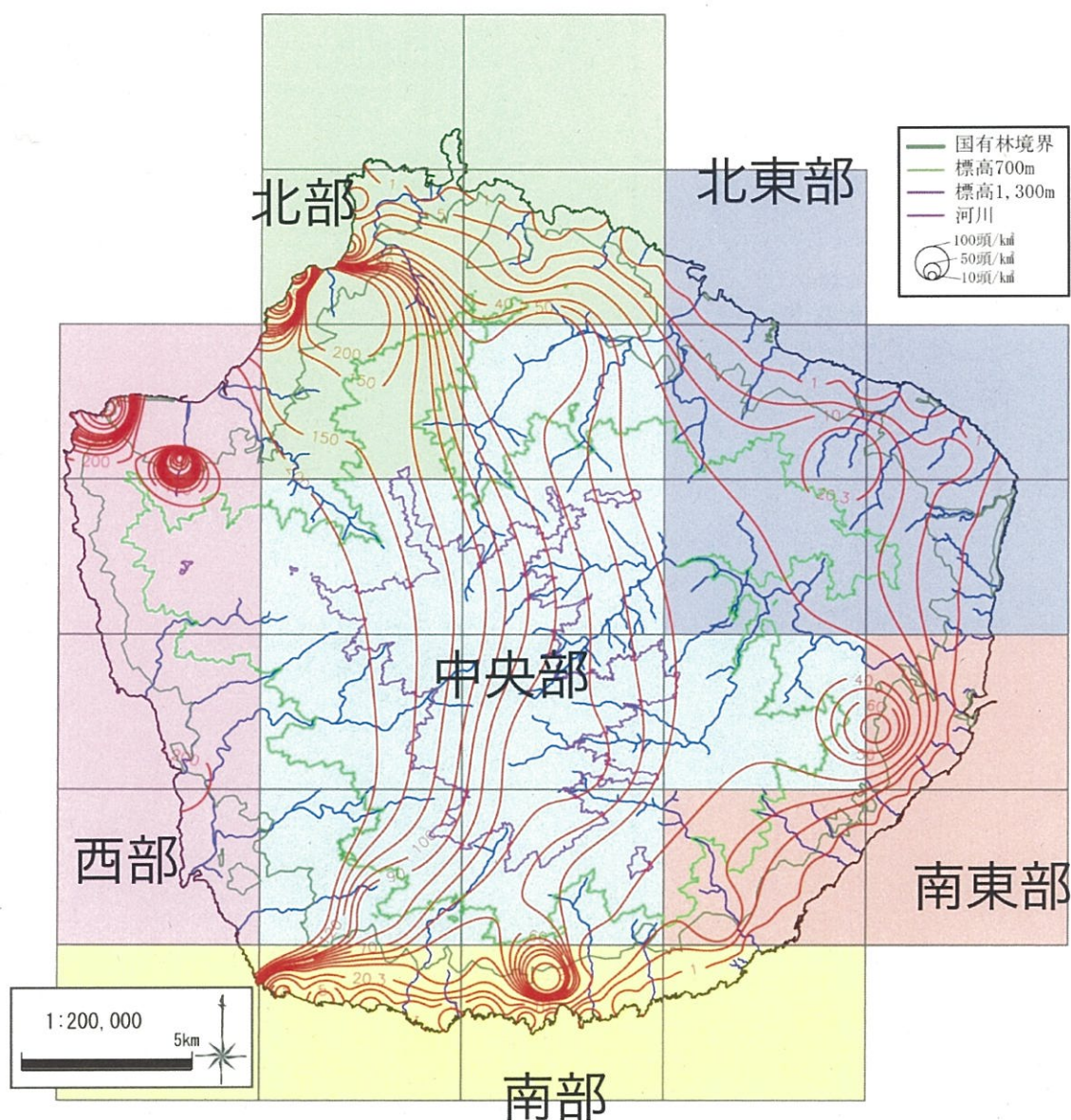


図 2 平成 26 年度糞粒調査地点を元にした密度ポテンシャルによる分布パターン

表5. ブロック別推定個体数(頭)

ブロック 区分	平成 20 年度	平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度	
	補正なし モデル	海岸線0補正モデル (95%信頼区間上限値)		海岸線補正モデルを基本 に西部のみ補正なしモデル (95%信頼区間上限値)		海岸線補正モデルを基本 に西部のみ補正なしモデル (95%信頼区間上限値)	
北部	1,800	2,654	(3,776)	2,796	(4,508)	2,344	(3,138)
北東部	2,573	2,796	(3,825)	3,412	(5,540)	1,535	(2,645)
南東部	705	310	(496)	286	(400)	233	(410)
南部	732	772	(947)	193	(332)	496	(514)
西部	3,905	4,793	(6,355)	3,989	(6,665)	13,354	(23,425)
中央部	6,692	7,352	(8,483)	6,631	(10,078)	9,430	(13,492)
全体	16,015	18,677	(23,882)	17,307	(27,523)	28,392	(44,624)

※ モデルは海岸線に密度0を入れて補正した「海岸線0補正モデル」と「補正なしモデル」の二種類を検討。捕獲が進んでいなかった平成 20 年度では低地での捕獲圧や追い上げ効果を入れていない「補正なしモデル」を採用し、平成 24、25 年度では、低地での数千頭の捕獲の実態と追い上げ効果を考え、「海岸線0補正モデル」を採用した。

3. 捕獲シミュレーション

各ブロックの捕獲頭数と推定頭数を元に、Simbambi（堀野，2012）を用いて、個体数変動シミュレーション（レスリー行列シミュレーション）を行った。

なお、捕獲頭数は平成 26 年実績，推定頭数は平成 25 年度を基に実施した。

(1) 北部

① 平均値

平成 24 年度における平均増加率推定値を元に，増加率を平均 1.2 に設定した。平成 26 年度の捕獲頭数レベルでの年間 1,200 頭程度の捕獲を継続することで，平成 29 年度には，平方 km あたり 5 頭未満となる結果となった。

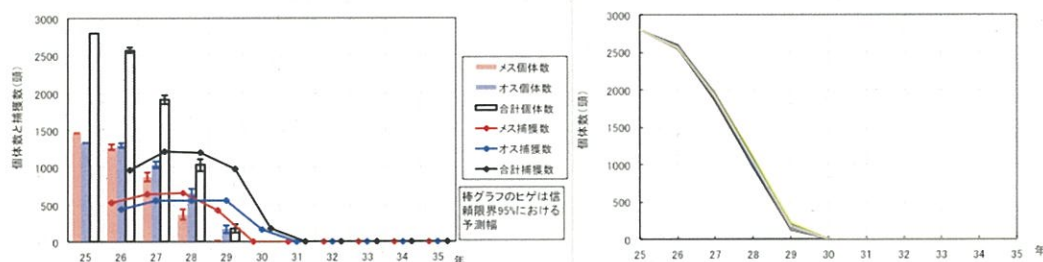


図3. 北部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度)

表6. シミュレーションによる北部の個体数の推移 (平均値)

区分 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29
メス	1,464	1,296	905	398	9
オス	1,332	1,355	1,111	737	257
合計	2,796	2,651	2,016	1,135	266
密度	38.2	36.3	27.6	15.5	3.6

1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意

2) 密度は基本生息面積を 55.3 km²とした場合の計算

表7. シミュレーションによる北部の捕獲個体数

年度		H25	H26	H27	H28	H29
区分	メス	524	648	650	650	650
	オス	438	558	550	550	550
	合計	962	1,206	1,200	1,200	1,200
実績	メス	524	648	-	-	-
	オス	438	558	-	-	-
	合計	962	1,206	-	-	-

② 95%上限値

増加率と年間捕獲頭数は平均値の場合と同じである。平成33年度には、平方kmあたり20頭未満となる結果となった。

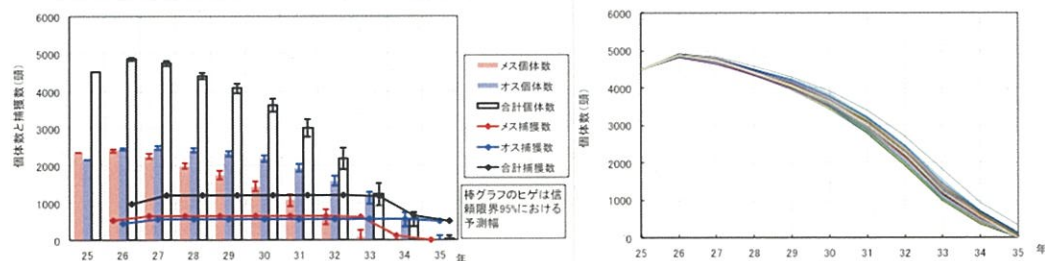


図4. 北部の個体数シミュレーショングラフ(横軸は年度; 95%上限値)

表8. シミュレーションによる北部の個体数の推移(95%上限値)

年度		H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33
区分	メス	2,360	2,409	2,256	1,995	1,747	1,441	1,064	611	99
	オス	2,148	2,449	2,485	2,416	2,326	2,173	1,926	1,581	1,122
	合計	4,508	4,858	4,742	4,411	4,073	3,614	2,990	2,192	1,222
	密度	61.7	66.5	64.9	60.3	55.7	49.4	40.9	30.0	16.7

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を55.3km²とした場合の計算

(2) 北東部(愛子岳)

① 平均値

平成24年度における平均増加率推定値を元に、増加率を平均1.22に設定した。平成26年度の捕獲頭数レベルでの年間1,300頭程度の捕獲を次年度も継続することで、平成29年度には、平方kmあたり10頭未満となる結果となった。

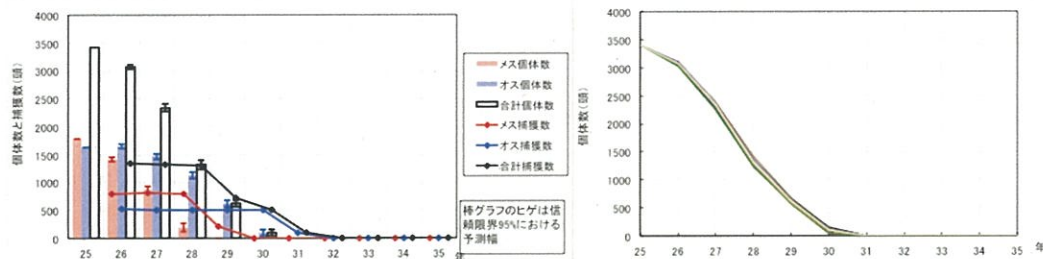


図5. 北東部(愛子岳)の個体数シミュレーショングラフ(横軸は年度)

表9. シミュレーションにおける北東部（愛子岳）の個体数の推移

年度 区分	H25	H26	H27	H28	H29
メス	1,786	1,413	866	197	0
オス	1,626	1,656	1,472	1,121	622
合計	3,412	3,069	2,338	1,319	622
密度	46.7	42.0	32.0	18.0	8.5

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を 75.8 km²とした場合の計算

表10. シミュレーションにおける北東部（愛子岳）の捕獲個体数

年度 区分		H25	H26	H27	H28	H29
計画	メス	805	818	800	800	800
	オス	532	511	500	500	500
	合計	1,337	1,329	1,300	1,300	1,300
実績	メス	805	818	-	-	-
	オス	532	511	-	-	-
	合計	1,337	1,329	-	-	-

② 95%上限値

増加率と年間捕獲頭数は平均値の場合と同じである。平成 34 年度には、平方 km あたり 20 頭未満となる結果となった。

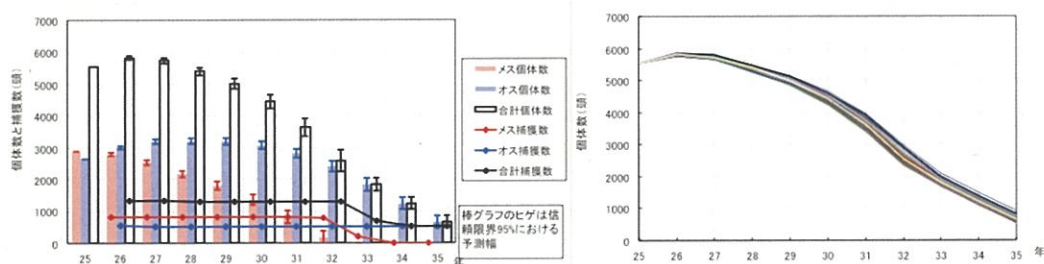


図6. 北東部（愛子岳）の個体数シミュレーショングラフ（横軸は年度；95%上限値）

表11. シミュレーションにおける北東部（愛子岳）の個体数の推移（95%上限値）

年度 区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
メス	2,900	2,799	2,543	2,180	1,806	1,363	816	171	0	0
オス	2,640	3,016	3,187	3,210	3,196	3,077	2,819	2,408	1,829	1,235
合計	5,540	5,815	5,730	5,389	5,001	4,440	3,634	2,578	1,829	1,235
密度	75.8	79.6	78.4	73.7	68.4	60.7	49.7	35.3	25.0	16.9

(3) 南東部（安房）

① 平均値

増加率を平均 1.22 に設定した。既に平方 km あたり 10 頭未満が達成されている結果となった。この結果は、現状とは乖離していると考えられ、ブロック内個体数が大幅に過少評価され、また、北東部、中央部からの流入が生じている可能性が高い。今後、地点数を増やし、より高密度の地域を検出できるようにするなど精度を上げる必要がある。また、今後の増減傾向により、順応的に捕獲数を決める必要がある。

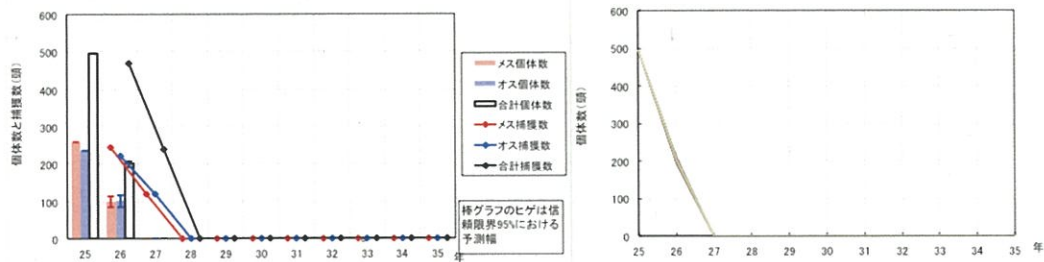


図7. 南東部（安房）の個体数シミュレーショングラフ（横軸は年度）

表 12. シミュレーションにおける南東部（安房）の個体数の推移

区分 \ 年度	H25	H26
メス	150	0
オス	136	10
合計	286	10
密度	7.7	0.3

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を 37.1 km²とした場合の計算

表 13. シミュレーションにおける南東部（安房）の捕獲個体数

区分 \ 年度	H25	H26
計画	メス	310
	オス	224
	合計	534
実績	メス	223
	オス	247
	合計	470

② 95%上限値

95%上限値を元に計算しても、同様に平方 km あたり 10 頭未満が達成されている結果となり、補正幅が足らず、課題は平均値の場合と同様である。

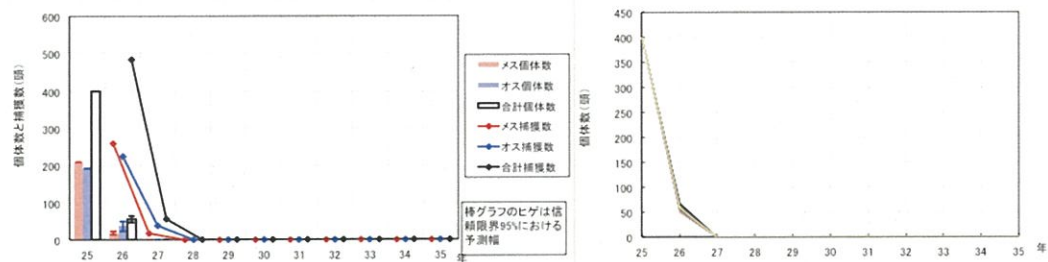


図8. 南東部（安房）の個体数シミュレーショングラフ（横軸は年度；95%上限値）

表 14. シミュレーションにおける南東部（安房）の捕獲個体数（95%上限値）

区分 \ 年度	H25	H26
メス	209	19
オス	191	37
合計	400	56
密度	10.8	1.5

(4) 南部

① 平均値

西側に高密度増加地域が顕著になってきており、増加率を平均 1.22 に設定した。このブロックも平成 26 年度には、平方 km あたり極少となり、結果と実際の状況との間の乖離が激しいと考えられる。密度推定地点を増やして全体推定個体数の精度を上げる必要があり、また、捕獲が少ない中央部や極大密度が示される西部からの流入が実際に生じているものと思われる、更に捕獲圧をかける必要が生じるものと考えられる。

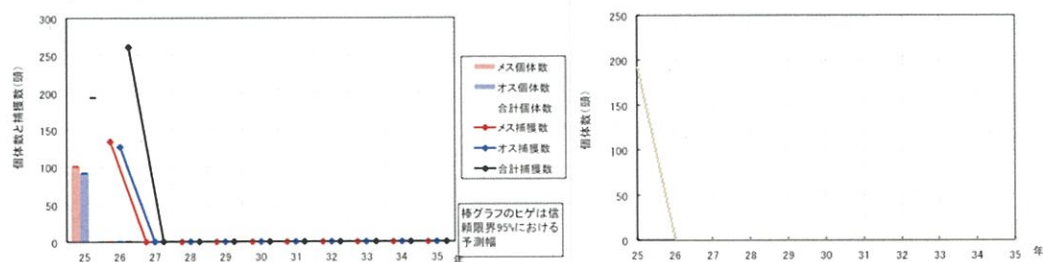


図 9. 南部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度)

表 15. シミュレーションにおける南部の個体数の推移

区分 \ 年度	H25	H26
メス	101	0
オス	92	0
合計	193	0
密度	7.7	0.0

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を 24.5 km²とした場合の計算

表 16. シミュレーションにおける南部の捕獲個体数

年度		H25	H26	H27
区分				
計画	メス	220	251	250
	オス	243	200	200
	合計	463	451	450
実績	メス	220	251	-
	オス	243	200	-
	合計	463	451	-

② 95%上限値

上限値を採用した場合も、実際の状況との乖離は、ほとんど埋まらない。このブロックについては、暫定的に、流入元となっていると思われる中央部との合算で、捕獲を検討する必要があるものと思われる。

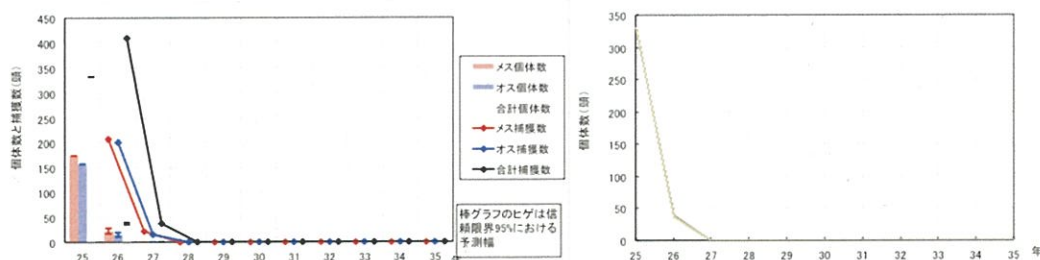


図 10. 南部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度; 95%上限値)

表 17. シミュレーションにおける南部の捕獲個体数 (95%上限値)

区分 \ 年度	H25	H26	H27
メス	174	22	0
オス	158	15	0
合計	332	38	0
密度	13.3	1.5	0.0

(5) 西部

① 平均値

増加率を平均 1.2 に設定した。現状レベルの 1,300 頭レベルの捕獲を継続した場合、平成 33 年度には、平方 km あたり 5 頭以下の密度になる結果となった。

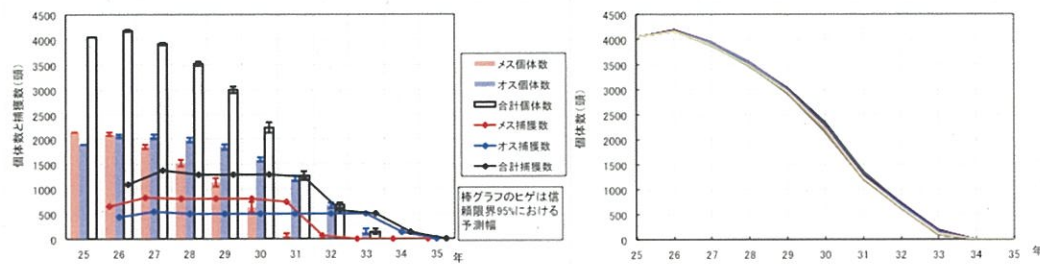


図 11. 西部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度)

表 18. シミュレーションにおける西部の個体数の推移

区分 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33
メス	2,088	2,123	1,886	1,557	1,181	699	99	0	0
オス	1,901	2,165	2,185	2,103	1,974	1,741	1,363	823	287
合計	3,989	4,288	4,071	3,660	3,155	2,440	1,462	823	287
密度	88.6	91.4	85.7	77.1	65.5	49.2	27.8	14.6	3.1

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を 45.7 km²とした場合の計算

表 19. シミュレーションにおける西部の捕獲個体数

区分 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33
計画	メス	648	837	800	800	800	800	800	800
	オス	442	539	500	500	500	500	500	500
	合計	1,090	1,376	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300
実績	メス	648	837	-	-	-	-	-	-
	オス	442	539	-	-	-	-	-	-
	合計	1,090	1,376	-	-	-	-	-	-

② 95%上限値

また、95%信頼区間上限値を取った場合は、実に 5 倍程度の個体数となる結果となった。

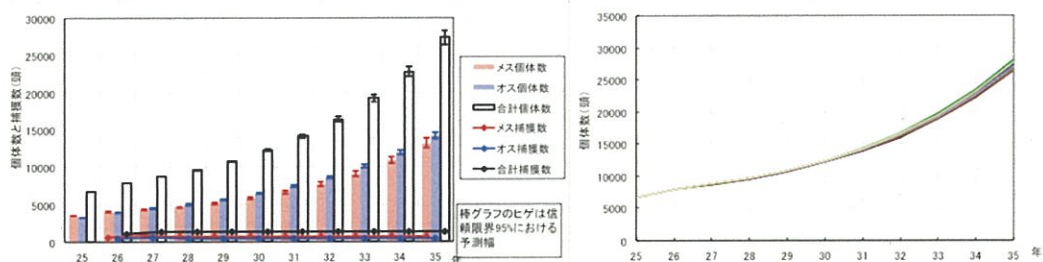


図 12. 西部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度; 95%上限値)

表 20. シミュレーションにおける西部の捕獲個体数 (95%上限値)

年度 区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
メス	3,489	3,986	4,293	4,608	5,117	5,793	6,633	7,704	9,104	10,896
オス	3,176	3,909	4,445	4,948	5,646	6,481	7,450	8,640	10,099	11,908
合計	6,665	7,895	8,738	9,557	10,763	12,274	14,083	16,344	19,203	22,804
密度	145.8	168.2	188.5	209.1	241.3	283.7	337.0	406.0	495.5	610.4

(6) 中央部

① 平均値

平成 25 年度推定個体数を基に、増加率を平均 1.20 に設定した。現状レベルの捕獲を継続した場合でも、平成 35 年度には、平方 km あたり現在の 5 倍程度の密度になる結果となった。これらの増加した地域個体群は、このブロックの中にとどまらず、特に中央部低山地域の高密度地帯から他のブロックに移出し、捕獲に依る減少分を相殺し、更に全体の個体数を押し上げる可能性も考えられる。

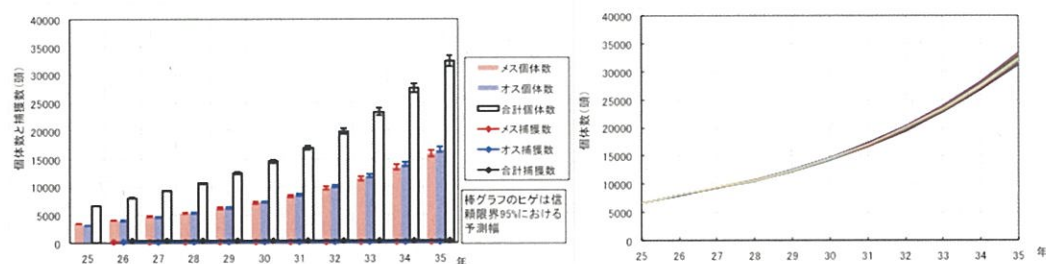


図 13. 中央部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度)

表 21. シミュレーションにおける中央部の個体数の推移

年度 区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34	H35
メス	3,471	4,103	4,702	5,319	6,162	7,186	8,375	9,788	11,486	13,495	15,866
オス	3,160	3,956	4,621	5,309	6,221	7,321	8,591	10,097	11,893	14,015	16,533
合計	6,631	8,059	9,323	10,628	12,383	14,507	16,966	19,885	23,380	27,510	32,398
密度	30.9	37.5	43.4	49.5	57.7	67.6	79.0	92.6	108.9	128.1	150.9

- 1) 合計値は小数点以下の値による誤差を含むため整数合計値と値が異なることに注意
- 2) 密度は基本生息面積を 214.7 km²とした場合の計算

表 22. シミュレーションにおける中央部の捕獲個体数

年度 区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
計画	メス	167	212	200	200	200	200	200	200	200
	オス	168	224	200	200	200	200	200	200	200
	合計	335	436	400	400	400	400	400	400	400
実績	メス	167	212	-	-	-	-	-	-	-
	オス	168	224	-	-	-	-	-	-	-
	合計	335	436	-	-	-	-	-	-	-

② 95%上限値

95%信頼区間上限値を取った場合は、現状の捕獲数の5倍を捕獲しても、10年で4.5倍程度の個体数となる結果となった。

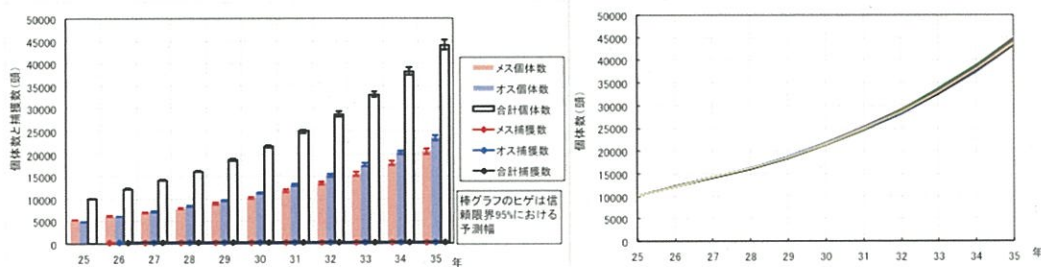


図 14. 中央部の個体数シミュレーショングラフ (横軸は年度; 95%上限値)

表 23. シミュレーションにおける中央部の捕獲個体数 (95%上限値)

区分 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
メス	5,276	6,150	7,011	7,846	8,969	10,304	11,805	13,554	15,576	17,899
オス	4,802	6,059	7,186	8,278	9,675	11,295	13,112	15,184	17,572	20,321
合計	10,078	12,209	14,197	16,124	18,644	21,599	24,918	28,738	33,148	38,220
密度	46.9	56.9	66.1	75.1	86.8	100.6	116.1	133.9	154.4	178.0

表 24. シミュレーションにおける中央部の捕獲個体数

区分 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	H33	H34
計画	メス	167	212	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	オス	168	224	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	合計	335	436	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
実績	メス	167	212	-	-	-	-	-	-	-
	オス	168	224	-	-	-	-	-	-	-
	合計	335	436	-	-	-	-	-	-	-

4. 齢査定調査

今回、これまでの齢査定結果を基に、OpenBUGS（ベイズ推定用オープンソース・ソフトウェア）を用いてディリクレ分布による各齢別比率の推定を行った。

その結果、事後分布を10万回（サンプル）の計算を求めた結果から、ヤクシカの齢構成が予測された（表 25）。

また、この推定結果で得られた中央値を基に齢構成を示した（図 15）。

ベイズによる予測結果を元に、ヤクシカの齢構成を見るとオスの0～1歳までの比率は低く、この期間にメスに比べ、より強い死亡率がかかっている可能性が示唆された。メスの最高齢は、オスよりもかなり伸びているが、両者とも8齢を超えると生存比率が下がる傾向が見られた。

表 25. 既存、齢査定結果を基にディリクレ分布予測により推定した齢別個体数頻度

齢 (年)	メス齢別頻度					オス齢別頻度				
	平均	標準偏差	下限 97.5%	中央値	上限 97.5%	平均	標準偏差	下限 97.5%	中央値	上限 97.5%
0	0.151	0.028	0.100	0.149	0.209	0.050	0.015	0.024	0.048	0.083
1	0.091	0.022	0.052	0.089	0.139	0.168	0.026	0.120	0.167	0.223
2	0.199	0.031	0.142	0.198	0.263	0.282	0.031	0.223	0.281	0.346
3	0.181	0.030	0.127	0.179	0.242	0.198	0.028	0.146	0.197	0.256
4	0.103	0.023	0.061	0.101	0.153	0.050	0.015	0.024	0.048	0.083
5	0.060	0.018	0.029	0.058	0.101	0.074	0.018	0.042	0.073	0.114
6	0.066	0.019	0.034	0.065	0.109	0.050	0.015	0.024	0.048	0.083
7	0.054	0.017	0.025	0.052	0.093	0.079	0.019	0.046	0.078	0.120
8	0.012	0.008	0.001	0.010	0.033	0.015	0.009	0.003	0.013	0.036
9	0.012	0.008	0.001	0.010	0.033	0.010	0.007	0.001	0.008	0.027
10	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022	0.005	0.005	0.000	0.003	0.018
11	0.012	0.008	0.001	0.010	0.033	0.005	0.005	0.000	0.003	0.018
12	0.012	0.008	0.001	0.010	0.033	0.005	0.005	0.000	0.003	0.018
13	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022	0.010	0.007	0.001	0.008	0.028
14	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022					
15	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022					
16	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022					
17	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022					
18	0.006	0.006	0.000	0.004	0.022					
19	0.012	0.008	0.001	0.010	0.033					
合計	1.000	-	-	0.967	-	1.000	-	-	0.981	-

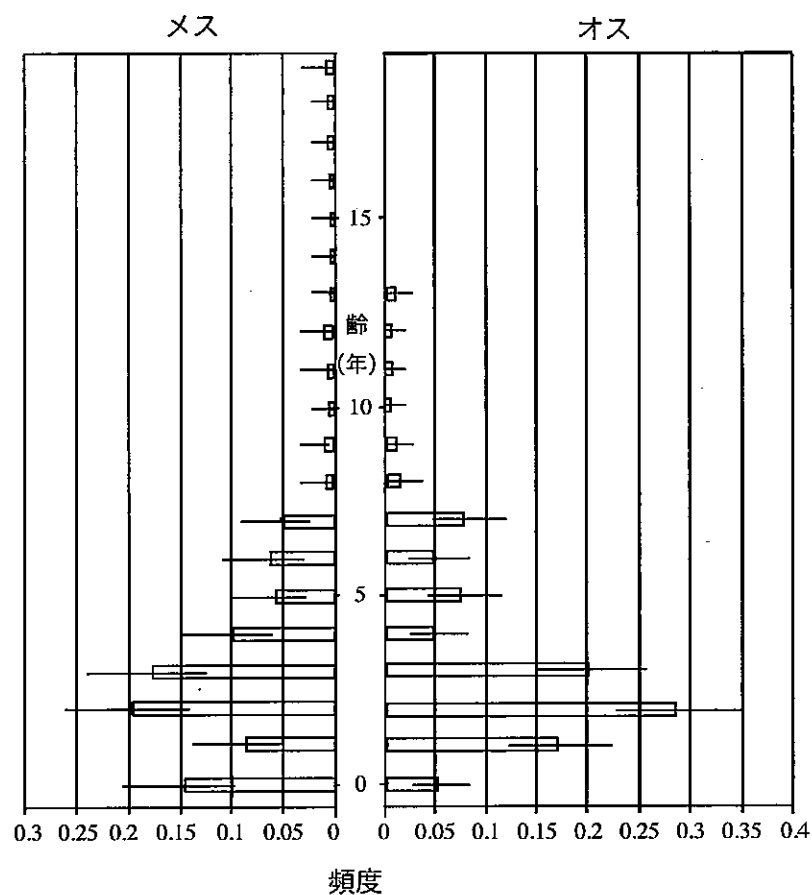


図 15. 既存サンプルを用いた齢別個体数頻度グラフ

【平成 27 年度の取組について】

これまで、特定鳥獣（ヤクシカ）保護管理計画に基づく取組として、「ヤクシカ保護管理適正化事業」により、①植生・植物被害調査、②齢査定調査、③密度推定調査を実施してきたところであるが、今般の鳥獣保護法の改正により、「指定管理鳥獣捕獲等事業」が創設され、国からの交付金を活用した事業の実施が可能となり、平成 27 年度から本県においても当該事業によるヤクシカ対策を実施することとしている。

平成 27 年度は、本事業でヤクシカの捕獲を実施するために必要となる「実施計画書」を作成するため、屋久島全域を対象とした生息状況調査を実施することとしている。

1. 事業名

指定管理鳥獣捕獲等事業（平成 26 年度補正予算）

2. 調査実施時期

平成 27 年 11 月以降

3. 調査方法

糞粒法により生息密度を推定し、その結果を基に個体数を算出する。

なお、個体数は、第二種特定鳥獣管理計画による地域区分ごとに算出する。

4. 調査地点

1 メッシュ（5 km メッシュ）に 2 地点程度（屋久島島内で 60 地点を上限）

5. その他

今後、屋久島において指定管理鳥獣捕獲等事業によるヤクシカの捕獲を実施するためには、第二種特定鳥獣管理計画に基づき、実施計画を作成する必要があるため、今年度実施する生息状況調査の結果を基に、実施区域の選定、捕獲目標の設定及び実施方法の検討などを行い、実施計画を作成することとしている。